2つ目は、本書のタイトルにも関わることであるが、ワースィティーを「イブン・タイミーヤ流のスーフィー（Taymiyyan Sufi）」として括ることの是非についてである。たしかに彼はイブン・タイミーヤに師事し、多大なる思想的影響を受けているが、第5章で示されているように、かつて所属していたシャーズィリー教団の教えを取り入れながら、独自のスーフィズム思想を形成することに成功していた。著者は終章でこの疑問に対し、イブン・タイミーヤのサークル内におけるスーフィー導師としてのワースィティーの役割を強調するために用いているため、この呼称は依然として有効であると論じている。しかし、彼がそうした地位に落ち着いたのは晩年のことであり、その期間だけを指し、またサークル内における彼の導師という役割のみに注目するようなこの呼び方は適当ではないように考えられる。イブン・カイイム・ジャウズィーヤをはじめとする他の弟子が「イブン・タイミーヤ流の」と形容されることはそう多くない。むしろそうしたラベリングは避け、師の影響を考慮しながらも個人の思想の独自性を見るべきであるというのが近年の研究の潮流である。そのため、スーフィーであると同時に法学者や神学者でもあった彼の立場・思想をより正確に表すためには、「伝承主義スーフィー（traditionalist Sufi）」もしくは「ハンバリー・スーフィー（ḥanbalī Sufi）」が代わりに用いられるべきであろう。そうすることで、イブン・タイミーヤ研究という1つの文脈だけでなく、より広い視座からワースィティーを捉え直すことができるのではないかと考えられる。

最後に若干の課題を提示したが、これは本書の価値を損なうものではない。本書はこれまで等閑視されてきたハンバル学派の思想家であるワースィティーの思想を、膨大な一次資料をもとに分析し、明らかにしたものである。これにより、ハンバル学派の学者および伝承主義者のスーフィズムの在り方の一例が提示されることとなった。また、従来の研究で不明瞭であった、ハンバル学派の思想家とタリーカの関係についても、非常に示唆に富む議論を提供している。さらに、本書で提示されたワースィテーの思想の鍵概念である「ムハンマドの道」や「目撃」が、後世の思想家にどの程度継承されたのかについての議論が今後待ち望まれる。本書はスーフィズム思想やイブン・タイミーヤだけでなく、マムルーク朝、伝承主義、タリーカなどに関心のある読者にとっても非常に有益なものである。本書により、当該分野における今後の研究の発展がより一層期待される。筆者自身もその一翼を担っていきたい。

〈参照文献〉

Addas, Claude. 2015. *La maison muhamamdienne: aperçus de la dévotion au Prophète en mystique musulmane*. Gallomard.

Post, Arjan. 2016. “A Glimpse of Sufism from the Circle of Ibn Taymiyya,” *Journal of Sufi Studies* 5(2), pp. 156–187.

（原　陸郎　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Rico Isaacs and Alessandro Frigerio (eds.). 2018. *Theorizing Central Asian Politics: The State, Ideology and Power*. Cham: Palgrave Macmillan. xix+319 pp.

1991年のソヴィエト社会主義連邦共和国（ソ連）崩壊から、30年が経過しようとしている。すなわち、ソ連崩壊と共に独立の道を歩み始めた中央アジア諸国（ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン、タジキスタン、トルクメニスタン）も、現在のような国家の形を取るようになってからも30年が経ったということになる。中央アジア諸国の独立当時は、政治体制の安定が急務であった。政治的・経済的諸問題によって発生した混乱を収拾し、独立国家としての立場を揺るがないものにすることが、当時の課題であった。

本書は、独立から現在に至るまでの国家形成プロセスを観察し、得られた経験に基づいて、中央アジアの政治理論分野における議論の深化を目的とした論説集である。中央アジアに焦点をあてた研究は、国際関係から歴史まで数多くなされてきたのは広く知られている。だが政治理論分野に関しては、未だに新しい観点が生み出されてこなかったと編著者のIssacsとFrigerioは主張している（p. 2）。西欧の社会科学的理論や概

念を単に中央アジアに当てはめるのではなく、地域から直接理論を生み出すのが望ましいが、それには限界がある（p. 3）。本書は、この地域を分析するための理論的・概念的な枠を拡大し、後の議論に資するものを読者に提供することを図っているため、実験的な側面がある。その一例として、本書に参加している著者には、現地の若い世代の研究者が多く含まれていることは特筆に値する。

本書の構成は、以下のようになっている。第1部は統治と権力を扱い、政権の「正当化（legitimation）」はどのような構造のもとで行われてきたかに着目する。この「正当化」概念は、本書の多くの章で度々言及される。第2部はイデオロギーを扱い、政権によるイデオロギーを正当化に利用する行為や、演説や個人崇拝などの手段に着目する。第3部は国家と政治秩序について扱い、国家の役割がどのように構成されてきたのか、国内外での政府機関の水準、政府当局と市民の関わり方を明らかにすることで、それらが権力を支えている構造について着目する。

1　政治理論と中央アジア――導入
第1部　統治モデルの探求
2　カザフスタンとトルクメニスタンの正当性と正当化
3　カザフスタンにおける統治構造の確立――統治性と新家産主義的資本主義の狭間
4　管理主義－ネオリベラリズム－発展の連携を理論化する――クルグズスタンの開発援助における支援者の展望と持続性の推移
5　中央アジアにおけるロールズ的自由主義と理性的マートゥリーディー・イスラーム
第2部　イデオロギー的正当化を明らかにする
6「国家の目的」を探索する――理論と実践　ポストソヴィエト期の中央アジアにおける国家イデオロギーの構成と主な特徴
7　区分化されたイデオロギー――カザフスタンにおける大統領演説と正当性
8「個人崇拝」を越えて――カザフスタンにおける権力の神聖化と君主制概念
9　永遠の「Futurostan」――ポストソヴィエト期のカザフスタンにおける、神話と空想とアスタナ建設
第3部　国家と秩序を再構成する
10　ポストソヴィエト期の外交政策における国家の独自性――中央アジアにおける理論と事例
11　国際関係理論の中心部か？リアリズムとリベラリズムの間の「国際社会」としての中央アジア
12　不完全な国家――中央アジアにおける国家の再概念化と社会関係
13　アルマトゥでのドライブ――国内のアナーキーな社会の皮肉な視点
14　あとがき――私の理論は何処に？

第1章（Rico Isaacs and Alessandro Frigerio）は、本書のイントロダクションの役割を担っているが、その中でこの30年間の中央アジア研究史を概観している。著者は1990年代の研究は、体制の類型化以上のことはせず、紛争や暴力の可能性や大統領のリーダーシップの特異性に着目するだけで、結果この地域を曖昧にし、東洋化（orientalize）してきたと批判している。また2000年代の研究は、ソ連時代の無神論政策を相対化し、伝統的な政策・社会規範が持続可能かを議論するものが多く、それらも欧米的かつリベラルな政治が正常であるという基準を前提にしており、本質的な理解に至っていないと指摘している。

第2章（Sofya du Boulay and Rico Isaacs）では、カザフスタンとトルクメニスタンの指導者が、いかにして体制を正当化してきたかを、「個人崇拝」と「経済発展の約束」などの手段がとられてきたことに着目して明らかにしている。またこの章では、Soestらによる中央アジア諸国の正当化政策の6つの指標（基盤となる神話・イデオロギー・個人主義・国際的な関与・政治過程・パフォーマンス）に対して［Soest and Grauvogel 2016: 18–41］、それぞれが重複しているとして批判が加えられている。確かに、Soestらの研究は旧ソヴィエト連邦構成国全般を扱っており、中央アジアにおける文脈を重視すると、Soestらの設定した指標は、著者が批判しているように細部に囚われた類型化という印象を与える。だが、指標を用いた分析の重要性は損なわれるわけではない。権威主義と一括りにされがちな地域においては、複数の指標を組み合わせることで、より具体的なイメージを提示できるというメリットがあるからである。よって著者による批判

は「指標が中央アジア地域に即さない」という点で妥当であるものの、指標自体を用いて分析することは依然として重要であるため、Soest らのアプローチの意義の重要性は変わらないと考えられる。またこの第 2 章では、地域研究から理論へのアプローチが積極的に試みられており、本書の目的にも合致している。

第 3 章（Assel Tutumlu）では、カザフスタンが正式な制度を装いながら、グローバル市場を解放する新家産的資本主義（Neopatimonial Capitalism）を発展させることができた理由について書かれている。権力者と、レントの分配に従属する人々の関係で成立する新家産主義と資本主義は共存するものであり、効率的な市場経済を生み出すために福祉の領域が縮小し、人々は政治権力と結びついた非合法的な人脈に依存することで、現在の体制を維持できていると指摘されている。

第 4 章（Liga Rudzite）は、ネオリベラリズムと開発援助の関係性を、主にクルグズスタンのバトケンでの事例を使って明らかにしようと試みている。この章で言及される開発援助における「管理主義[1)]」は、開発援助の成否に結びつく要因として、支援者側の指標と開発現場での価値基準は乖離しているとして批判を受けやすい。だが管理主義がバトケンでの開発援助活動で浸透しており、社会的正義を訴える非西欧国家が開発援助に関わったとしても有効的な管理主義が定着している事実を示している。

第 5 章（Galym Zhussipbek and Kairat Moldashev）では、中央アジアにおけるイスラームと自由主義の両立の可能性について書かれている。ソ連時代の近代化政策によって、中央アジアの人々は世俗的な考えに抵抗を抱かなくなった反面、独立後はソ連統治によって浸透した平等主義・近代主義と従来のナショナルアイデンティティー・家父長制・伝統的価値観の衝突があった。著者は、合理主義かつ反覇権主義的なマートゥリーディー（Abū Manṣūr Muḥammad ibn Muḥammad al-Māturīdī, 873 以前–944 頃）[2)] の教えと、ロールズ（John Rawls, 1921–2002）[3)] の社会的公正の原則に、イスラームと自由主義の両立の可能性を見出している。

第 6 章（Parviz Mullojanov）では、中央アジアにおけるイデオロギー構築のプロセスを理論的・実践的に探求している。国家イデオロギーは権力の集中や強化などの特定の目的のために利用されてきた。一方で、国民の大多数が押し付けられたイデオロギーに従わず、国家内で政府の意図しないアクター間の線引きが行われれば、国民的イデオロギーは諸アクター間の対立を引き起こす要素になりうると指摘されている。

第 7 章（Diana T. Kudaibergenova）は、民族的に多様な背景を持つカザフスタンにおいて、政権による支配を正当化する過程で、何が重要視されてきたのかを明らかにしようとしている。この正当化のプロセスを分析するために、著者は政治信念体系を曖昧に並列させた、「区分化されたイデオロギー（compartmentalized ideology）」というスタンスを提唱している。独立前後に民族紛争がフェルガナ盆地で発生し、経済的にも不安定だった情勢を踏まえ、体制側は堅固で明確な国家イデオロギーを提唱するよりも、民族的・経済的アイデンティティーの違いによって体制の正統性を示す言説を変える「区分化されたイデオロギー」を使用する選択をした。政府は、短期的には国民の支持を取り付けることに成功しているかもしれないが、民族の調和とカザフ人の民族国家樹立という相反する目標を達成することはできず、体制が動揺する可能性があると指摘されている。

第 8 章（Adrien Fauve）では、カザフスタンでの権力集中構造を、「個人崇拝」という分析に留めず、カリスマ性を構築する権力の神格化と、伝統的な支配を構築する手段としての権力の神聖化という両義性に着目して解明する。また手法として、筆者はカザフスタンにおけるフィールドワークによって、街中にあるナザルバエフ大統領に所縁があるモニュメントと、それに対する市民の行動などを観察している。

第 9 章（Mikhail Akulov）は、カザフスタンの近代化政策に最も貢献した首都アスタナの建設は、大統領の権力の神格化に使われたと指摘している。

第 10 章（Selbi Hanova）では、国際舞台で立ち位置を定め、イデオロギーを構築しなくてはならなかった中央アジアで、国家の物語（narrative）はどのように開発されたのかを解明するため、クルグズスタンの事例に着目する。クルグズスタンの外交政策は、「実用主義」と「多方面主義」を標榜し、物流の交差点として

1） 開発援助における管理主義は、本書では「知識が問題を解決するという論理を標榜し、あらゆる問題に対する権力の介入を正当化する」と定義されている（p. 69）。

2） ムウタズィラ学派とアシュアリー学派の中道を行く独自の学派を打ち立て、人間の行為に関して自由意志を認める側面を持つ［竹下 2002］

3） 無知や貧困といった不平等を解決したうえでの平等な自由の重要性を訴え［ロールズ 2010: 277–279］、自由主義の議論に大きく貢献した。

の地位を有する経済的な「自由国」として立ち回ることを目的としている。一方でこのような政策の傾向は、逆に言えばクルグズスタンのナショナリティを象徴するものがいまだに欠如していることを示しており、国家としてのアイデンティティが不安定な状態が日常化していると著者は指摘している。

第 11 章（Filippo Costa Buranelli）は、国際関係論から中央アジア諸国間関係にアプローチを試みる。目だった国家間紛争がない一方で、水や国境管理に関しては互いに争っているという認識が定着している中央アジア諸国の関係を扱った研究は、諸国間の協力関係の構築を疑問視するものもある一方で、近年では関係の発展を期待する研究も広がっている。このような先行研究を踏まえ、筆者は競争と協力の中庸に活路を見出す、英国学派[4] の理論的レンズを用いて分析している。

第 12 章（Viktoria Akchurina）では、中央アジア諸国の国家建設プロセスが不完全であることに着目し、国家の国際社会的孤立、国境を越えた依存関係、宗教や水といった問題によるジレンマを通じて、中央アジアだけではなく、従来の社会的空間や国家の領域性に関する認識を再考することを目的としている。著者は、中央アジアの国家形成のプロセスを分析するにあたり、自由民主主義体制への帰着を前提とし、そうでない国家は「破綻国家」であるというアプローチに疑問を呈しており、国家と社会の相互関係に着目しながら「不完全な国家（incomplete state）」として中央アジア諸国を分析することを提唱している。

第 13 章（Alessandro Frigerio）では、著者がカザフスタンの都市・アルマトゥで自動車を運転した経験から、それを政治理論に応用しようとする実験的な考察が展開されている。道路上での人々の相互関係が社会を形成するといった点から、国家による規制と人々が暮らす現場で共有される規範とのギャップを分析するための着想を得ようと試みられている。

第 14 章（Rico Isaacs and Alessandro Frigerio）は締めくくりとして、各節で提唱されたアイデアや具体案に対し、実現性があるかを再び問いかけるといった内容となっている。最後に編著者は、本書の各章が一貫して中央アジアでの具体的事例から政治理論へアプローチしていることを強調した。中央アジアで政治的な硬直・伝統的な構造の復活が観測されている事実を認めつつも、新しい政治理論のフレームワークがこの地域から誕生することを期待し、締めくくられている。

以上で各章の内容を概観したように、長い歴史と新興国という側面を持つ中央アジア諸国が、いかにして体制を正当化してきたかを振り返る内容となっている。本書の議論は中央アジア研究だけでなく、権威主義体制や、国家論にも有用であると思われる。

中央アジアという地域を俯瞰する視点、国ごとで分析する視点、国内制度に着目する視点など、分析の始点となる階層はいくつか考えられるが、どの階層を扱う研究であっても、多彩な領域を横断する視座が求められる。本書のように「実践から理論へのアプローチ」のような共通の目標の下で、学際的に多様な論考をまとめる動きは今後さらに増えていくと考えられる。

だが本書の構成上、いくつか言及せねばならない点があるのも事実である。まず「中央アジアの政治学を理論化する」と銘を打ってはいるものの、大半の章がカザフスタンの事例を取り扱っており、題材地域のバランスが取れていない。情報の収集難易度という観点では、確かにカザフスタンやクルグズスタンの方が低く、それゆえ地域が偏っている事実は編者が認めるところである。だがこの傾向は単純に批判されるだけでなく、ウズベキスタン・タジキスタン・トルクメニスタンの事例から理論にアプローチを試みる余地がまだ残されていることを示している。

また、実践から理論へのアプローチは容易ではないことも、いくつかの章から見て取れる。第 11 章では、国家中心主義的な側面を持つ英国学派に対して、中央アジアでは国家の視点だけでは分析が不十分であり、国内でみられる社会制度や脆弱な制度などが及ぼす影響を考慮に入れるべきだと提唱されている。だが、具体的にどのような国内問題が国際関係に影響を及ぼすのか、といった点には踏み込まれていない。また第 7 章では、「区分化されたイデオロギー」によって、国内の異なるアイデンティティーに対してどのように言説の内容を変化させているのかについての言及が少なく、具体的事例が欠如しているように見受けられた。

＜参考文献＞

4）　国家秩序の維持を重視するリアリストに分類される［ナイ 2002: 83］。

竹下政孝 2002「マートゥリーディー」「マートゥリーディー学派」大塚和夫・小杉泰・小松久夫・東長靖・羽田正・山内昌之（編）『岩波イスラーム辞典』岩波書店.
ナイ ジュニア, ジョセフ・S. 2002『国際紛争――理論と歴史』（田中明彦・村田晃嗣訳）有斐閣.
ロールズ, ジョン 2010『正義論』（川本隆史・福間聡・神島裕子訳）紀伊国屋書店.
Soest, Christian von and Julia Grauvogal. 2016. “Comparing Legitimation Strategies in Post-Soviet Countries,” in Martin Brusis, Joachim Ahrens and Martin Schulze Wessel (eds.). *Politics and Legitimacy in Post-Soviet Eurasia*, Hampshire: Palgrave Macmillan, pp. 18–41.

（市川　太郎　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Anna M. Gade. 2019. *Muslim Environmentalisms: Religious and Social Foundations*. New York: Columbia University Press. xii+324 pp.

地球環境問題が国際的な社会問題として表面化してから半世紀が経つ。迫りくる環境危機に対し、人文・社会科学の側からも様々な理論的枠組みが構築され、学際的な取り組みがなされてきた。なかでも環境学とイスラーム学を結合したアプローチは最も新しいものの１つであり、近年発展が著しい。

イスラーム世界の人びとが現代の環境問題に無関心であるかというと、そうではない。むしろサイイド・ホセイン・ナスルのような哲学者や、彼の影響を受けた研究者やイスラーム法学者は、主に欧米で構築された環境主義（environmentalism, 人間と環境とのかかわり方において生じた変化に対する人間からの応答を指し、思想から行動まで広く含まれる）の議論にイスラームを基にした解釈を組み合わせることで、イスラーム的な環境主義の思想・理論を構築してきた。本書はこれまでの議論を継承しつつ、新たなアプローチからイスラーム世界における多様な環境主義が持つ思想と実践を捉え直し、ムスリム独自の環境との関係性の実像により迫った貴重な労作である。

著者は本書を通じてイスラーム学と環境学の分析枠組みを拡大することで、ムスリムにとっての環境という概念が、グローバル化のなかで生きるムスリムが実際に認識するかたちで、人文学的に理解されることを促している。著者は10年以上にわたるフィールドワークを基にした民族誌的手法、そして聖典やイスラーム法、現地語の文献や史料、グローバル化のなかで流布する環境思想など幅広い研究資料を対象にした解釈学的手法を用いている。

2004年から2019年にかけて著者が残してきた論文や講義の集大成である本書は、分野横断的な研究により、イスラーム学と環境人文学の新たな地平を切り開くだけでなく、宗教学や東南アジア地域研究、文化人類学、歴史学など多岐にわたる分野に有益な情報と視座を提供している。

なお、著者はシカゴ大学で宗教史の博士号を取得したのち、主に東南アジアにおけるイスラーム教育に関する研究を行う一方で、英語の『クルアーン』読解入門書複数冊の分担執筆者としても業績を残してきた。2004年から著者は宗教と開発を扱うテーマに取り組んできたが、2014年に米国のウィスコンシン・マディソン大学ゲイロード・ネルソン環境学研究所に所属して以来、本書に代表されるような宗教史に環境学を組み合わせた研究に重心を移している。著者は2021年現在も特別栄誉教授として本研究所に所属している。

本書は全７章で構成されており、全体の章立ては以下の通りである。

第１章　宗教史、イスラーム、環境人文学
第２章　イスラームと環境――多元主義と開発
第３章　『クルアーン』からみた環境――生物と資源に関して
第４章　イスラーム的な環境正義、法、倫理の根と枝
第５章　イスラーム人文学――シンボル、表現、自然科学を捉える
第６章　宗教的実践としてのムスリム環境主義――見えざるものの評価